
壁とその不確かな存在

千住夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壁とその不確かな存在

【Nコード】

N1938V

【作者名】

千住夏樹

【あらすじ】

つまりはそういうことだ。その壁は僕の生まれる遙か前から存在し、今も頭上高くそびえ立っている。

大人たちは誰も近付こうとしないし、僕らには絶対近付いてはいけないと脅しの言葉すらかける。

だから、この街の人々はそこに存在する壁のことをまるで無視するように話題にもしない。まるでそんなものはこの世に存在しないみたいに。

つまりはそういうことだ。その壁は僕の生まれる遙か前から存在し、今も頭上高くそびえ立っている。

大人たちは誰も近付こうとしないし、僕らには絶対近付いてはいけないと脅しの言葉すらかける。

だから、この街の人々はそこに存在する壁のことをまるで無視するように話題にもしない。まるでそんなものはこの世に存在しないみたいに。

思春期真っ只中の僕は恋をした。初恋ってやつだ。まるで感染力の強いインフルエンザにかかったように僕の心は一瞬でその女の子一色になった。

寝ても覚めても僕はその子のことを思った。授業中もその子の後姿を追い続けた。

授業が始まってから終わりのチャイムが鳴るまで視線を投げ続けた。

丁度席が斜め後ろだったこともあり僕はその子の斜め後ろからの姿を本当に美しいと思った。

とうとうその子も僕の視線に気付いたようだ。

時々頬を赤らめて僕にはににkind視線を投げた。

そんな悶々とした日々が続き、僕は意を決してそのサキという子をデートに誘った。

答えはイエスだった。

待ち合わせ場所には雪が降り続いていた。まるで天使の羽根のように柔らかな雪が、際限なく舞い降りていた。

壁もその灰色の姿を白く染め、威圧するようないつもの風情を押し隠していた。

約束の時間が過ぎてもサキは来なかった。

僕は待ち続けた。肩に積った雪をほろいながら待った。

1時間、2時間、底冷えのする足下はとうに感覚がなかった。手袋をした指先に何度も何度も息を吹きかけた。

3時間、4時間・・・さすがの我慢強い僕も諦めかけた時、見覚えのある紺のダッフルコートが蒸気機関車みたいな息を吐きながら僕に走りよってきた。

「まだ、いてくれたんだね・・・」

「もちろんさ、約束だもの・・・」

「簡単に約束してしまっただけで、迷ってたのついさっきまで・・・正直言うとね、自分に自信がなかったの・・・」

「でも、君はここにいる」

「そうね、こんなに待たせてしまって、ほんとにごめんなさい」

サキは優しく僕の肩の雪をほろいながら言った。

「とり合えず暖まろうか、どこかで」

言いながら僕は歩き出した。サキは僕の後ろに従った。

雪は相変わらず降り続いていた。

唐突にサキが僕の腕に腕を絡め身体を寄せた。

張り裂けそうな心臓の鼓動、みるみる頭に血が昇るのが分かった。

「震えてるね、こうすれば少しは暖かいかな」

赤い頬、まつげに積った雪の結晶、サキは僕の全てになった。

壁の向こう側の話を聞いたことがあった。

それは殆ど噂話の類で、どれもが真実にはほど遠い気がするものばかりだった。

例えば草木一本すら生えておらず不毛の大地が永遠に続いているだとか、得体の知れない獣がうじゃうじゃ徘徊してるだの、死者の魂が流離っているだの、生き返った死体が彷徨い歩いているだの、まあそういった流言蜚語の類いのことだ。

一度この壁をよじ登ろうとした勇氣のあるものがいたが、結局半

分も登らないうちに落下し、死んだ。

今もその男の墓碑が、壁の傍に立っていて、たむけの花は途切れることがない。

そしてその墓碑の傍には同じように命を落とした勇気ある者の墓標がいくつも連なっていた。

飛行機で上空を通過するのは簡単なことのように思えたが、壁の近辺は飛行禁止空域に指定されており、未だに誰もこの壁の向うを見たものはいない。そして、入ったものも出て行ったものももちろんいないのだ。

喫茶店に入り、僕はカフェオレ、サキはアップル・ティーを飲み僕たちは時が経つのを忘れるほど語りあった。言葉は後から後から溢れ、サキの一挙手一投足が僕の心を幸福にした。

喫茶店を出てもどちらからも別れの言葉が言えず、僕たちは深々と雪の降る街を歩き続けた。真っ白な雪の中に二人の足跡が重なって僕らの後を追った。

降り積もった路面の雪を払うササラ電車を見ながら僕らは長い長い沈黙の中にいた。

まるで、さっきまで語り合ったことが嘘のような沈黙。

見つめあったまま、僕らはササラ電車が通過してゆく景色の中にいた。

間際猛烈な雪煙が舞い、僕らを包んだ。

どちらからともなく寄り添い抱き合った。

頬と頬が触れ、吐息が重なった。サキの唇を求めた。軽く触れ、すぐに離れた。

いいようなない幸福感が僕を捕らえ、サキは頬を赤く染め俯いた。

「恋している、僕はサキに恋しているんだ！」声に出して叫びたかった。

何か言いたそうに上目遣いにサキが僕を見つめていた。

その顔に容赦なく真綿のような雪が舞い落ちる。僕は息を吹きかけサキの眉毛に落ちた雪を払う。サキの上気した頬を手袋をはいた手で包んだ。

サキは微笑み、僕はその微笑で胸が一杯になった。

そんな僕らを雪化粧をした壁が無言で見下ろしていた。

壁は余りにも高くいつも頭上を分厚い雲で覆われていたので、誰もその頂上を見たことがない。僕らの街をぐるっと取り囲み、外界との接触を完全に遮断しているその灰色の壁は、学校の教室からものはつきりと見ることができる。

しかし、先生も生徒の誰もがそれを話題にすることはない。

余りにも長い間そこにあったから人はもう存在しないものとして片付けてしまっていたのだ。暗く重苦しい雰囲気は壁にはあった。それが余りにも巨大ならば尚更だ。壁とはそういうものなのだ。好むと好まざるとに関わらず一緒に内側に閉じ込められてしまっただ。

だから人は壁の存在自体を忘れようとし、そんな壁など存在しないという態度を貫くのだ。

そうでも考えなければ、圧倒的な存在感を誇示する壁を目前にしないでどうしたってこう思い当たってしまうのだ。

内側に住む僕らにとってはその壁こそが世界の果てなのだと・・・。

そして、その壁の存在とは無縁に長い冬が終わり、穏やかな春から季節は夏へと移り過ぎていった。

その灰色の壁に切り取られた空を僕は、校舎の屋上から不味いハムサンドを食べながらいつもため息まじりに眺めていた。

「ここ座っていい？」

見上げると眩しさに一瞬眼が眩んだ。

「珍しいね、洋子たちと食べなかったの？」

サキはクラスでは全く目立たない存在だ。時々わざとそうしてるんじゃないかと思ったりする。一度そのことを聞いたことがあった。サキは何の躊躇いもなく、自分の存在を消してしまいたいと僕に言った。ましてや僕と付き合ってるなどとクラスに知れわたったらきつと学校には来なくなる、そういった類いの女の子なのだ。

だから、学校では極力僕もサキも親しい態度などは一切とらない。

それはお互いの暗黙の了解ごとになっていたのだが、近頃はデートにも誘っていなかった。

「だって来生君、最近よそよそしいんだもの、なんだか私のことさけてるみたいで・・・」

確かに僕はサキをさけていたかも知れない。僕は自分で言うのもなんだが健全で健康な男子なのだ。デートをする度に、抱き合いキスをして別れる。このままでいいんだという理性と、それ以上を望む僕がいる。生理的には僕はもう既に大人なのだ。

下半身の疼きを何度も感じた。その都度知られまいと僕は相応の忍耐を強いられた。

オナニーの相手はいつもサキだ。もう何度夢想でサキとセックスしたことだろう。そういったサキには知られたくない僕自身の問題で、知らず知らずによそよそしい態度をとっていたのかも知れない。

「そういう風に思わせたのならごめんね。サキは何も悪くないし、これは僕の個人的なことで、今だって、これから、サキは僕にとつて一番大切な人だからね」

サキに笑顔が戻った。僕の隣で弁当箱を広げ、美味しそうに食べている。

「食べる？」

箸にとった厚焼き玉子を僕の口に持ってきてながらサキが言った。

僕は一口ではお張り一気に飲み込む。

「美味しい」と僕はお座なりな言葉を返し、

「ほんとに？」とサキが真顔で尋ねた。

それには答えずパックの牛乳を飲み干す。

「来生君、いつもここで昼食食べるの・・・」

「ああ、あの灰色の壁を見ながらね一人で食べる、いつもね」

サキは不思議そうに僕を見つめる。

「壁？・・・灰色の壁ってなあに？」

雲一つない夏空。辺りは場違いなほどの静寂の中にあつた。

そうか、サキにはあの壁が見えないのだ。サキなら見えると勝手に思い込んでいた。

あの大人たちと同じように壁などないのだと意識の中に刷り込まれている、サキもその一人なのか・・・。

「うん、それについては今は上手く説明できないんだ。今度二人で探検しよう、その灰色の壁をね」

サキは軽く微笑みまた弁当をつついた。

サキがこの壁の存在を認識したらいったいどう変わってしまっただろう。

僕たちは遥か昔から、そして今も、ずっと未来まで天を貫くほどの壁に囲まれて暮らしているんだと・・・。

朝、クラスに行くとき知らない顔が教壇に立っていた。始業のベルが鳴り先生が入ってくる。

「紹介しよう。××中学から転校してきた川田隆弘君だ。今日から君たちの仲間だ。川田君自己紹介しなさい」

「川田隆弘です。よろしくお願いします」

長身で痩せぎすなひよろつとした体型の川田は言いながら軽く頭を下げた。腕も脚も長く、

ボサボサの髪、眼だけが異様に鋭い。いるだけでかなり目立つ存在だ。

「そうだな、席はクラス委員の奥寺由美、お前の隣開いてるんだな。とり合えず、そこに座りなさい」

隣に座った川田を由美は興味津々といった顔で見つめている。

「奥寺、今日一日川田君この学校のこと分からないだろうから面倒見てあげなさい」

クラスの何人かの生徒が由美を冷やかすように口笛で答える。

奥寺由美は頭が良く、世話好きで、その上中々の美人ときてる。クラスではもちろん男子にも女子にも人気がある。ただ欠点と言えば、気が強すぎるってことくらいか。

既に由美は川田に何事か話しかけている。この学校のルールとかつまらないことだ、きつと。世話好きの面目躍如と言ったところだ。

奇妙な感覚があった。川田は教壇に立っていた時から、僕に視線を投げかけていた。朗かに僕を凝視していたのだ。

川田は僕のかなり前の席にいると言うのにずっと僕は川田の視線を感じているのだ。

そして、僕の脳裏にばやけてはいるが同じメッセージが繰り返して映し出されていた。

・・・あの壁の向こうから俺はきた。あの壁を知覚しているのはお前と俺だけだ。

分かるか来生、俺は川田隆弘・・・俺の思念をお前は認識できるはずだ。繰り返す、あの壁を知覚できるのはお前と俺だけだ。あの壁のことを誰かに言うのは勝手だが、誰も信じはしないだろう。そうだろ、来生。

昼休み、いつもの屋上のいつもの場所に向かった。

先客がいた。川田だった。悠然と煙草を吹かしていた。くしゃくしゃのマルボロの包みが左手に握られていた。

「吸うかい」

言われるまま煙草を受け取り一気に吸い込んだ。

咽た。激しい嘔吐感が何度も何度も押し寄せてきた。

「なんだよ、吸ったことないのか、無理するなよ」

川田が見かけによらず優しく背中を摩ってくれた。もちろん、多少の嘲笑を交えてだが。

「来生って言ったっけ・・・同じ匂いがするな俺と、一匹狼の匂い・・・」

川田は言いながら吸殻を指先で弾いた。

「変なことを訊くようだけれど、川田君にはあの壁が見えるのかい？」

「壁？壁ってなんのことだ」

川田は朗かにしらばっくれている。僕はそう直感した。

今日は蜃気楼のように霞んではいるけれど、灰色の壁はそう、そこにあるじゃないか。

「お前、ずっと俺のこと見てたよな・・・なんか俺変か・・・」

妙なことに気付いた。川田は口を開いてはいなかった。

この声は直接僕の脳裏に共鳴し、僕もまた言葉を発してはいなかったのだ。

「君が思念と呼んでいるもの、確かに僕には届いているよ。やはり君はあの壁の向こう側から来たんだね」

「そうだ、世界の果て、終末を迎えた世界から俺は来た。あの壁の向うは地獄だ。それを俺はお前に伝えにきた」

「やっぱりあの壁は存在するんだね、僕の妄想なんかじゃないんだね！」

「こんな世の中で自分を信じられなくなったら、それこそ最悪な結果を招く。そうだろ来生」

「だって誰もあの壁のことを語ろうとしないんだ！あんなにはつきりと存在してるってのに誰一人として話そうとしない」

「みんな満足してんだよ、この壁の中でぬくぬくと怠惰を貪りつけてるんだ。その方が楽だろ。人間なんて元来怠け者だからな、壁の向うのことなんか知りたくもないだろ」

「僕は知りたい！例えそこが君の言うように地獄だったり、終末が身近に迫った世界だとしても僕は知りたい！」

川田は屋上の手摺に寄りかかり、そして言った。

「ここから空に向かって飛べたら気持ちいいだろうな・・・壁の天辺を突き抜けてあっち側に行ったところで、待ってるのは地獄だとしてもな」

ある日の夕方、学祭の準備で遅くなるといい訳して僕らは2人だけの探検に向かう。

駅前で待ち合わせ、近くのコンビニでペットボトルに入ったミネラル・ウォーターとサンドイッチを二人分と、チョコレートお菓子などを買い、背負っていたデイ・パックにつめた。

サキの自転車を駅前の自転車置き場に置き、僕の自転車の後ろに乗れと合図した。

サキとの冒険に胸が高鳴った。この日は、いつものデートとは違う何か特別の意味があるように思えた。

コンビニの自動ドアを出、車道の左右を見渡す。壁は遥か彼方にある。懸命にペダルを漕いだ。

サキが肩に置いた手に力を込める。スピードを早めると、サキは僕の首に腕を回し、しがみつく。僕の期待は更に高まる。何を期待しているのか・・・夕暮れのそよ風が汗ばんだ身体に心地良かった。

「ここらこら止まりなさい！2人乗りは違反だ、降りなさい」

制服の警察官に止められた。

交番に連れて行かれ職務質問を受ける。

「学校は何処？名前は？何処に行くの？自転車は君のかね、そちらのお嬢さんのかね？」

僕は俯いたまま口を閉ざす。僕の手を強く握ったサキの指が震えていた。

電話のベルがけたたましい音を立てた。

僕もサキも心臓が飛び出そうなほど驚いた。

「はい、××交番です。はい、子供さんがですか、はいはい居ないんですね、公園で遊んでたんですね、はいはい、お母さん落ち着いてね、はいはい、とり合えず詳しくね、事情聞きますからね、住所は・・・はいはい、すぐ行きますから・・・」

薄汚れた壁に貼ってある町内の地図で電話の住所を確かめながら警察官が言う。

「今日はなんだかやけに電話が多いな、君たちちゃんここで待ってるよ。すぐ帰ってくるから、分かったな」

僕らは素直に頷く。

警察官が出て行くと交番には僕ら2人つきりになった。

サキと顔を見合わせる。

「逃げよう!」

「うん」

小一時間ほど全速で自転車を漕いだ。日はとつぷりと暮れていた。眼を凝らし壁を見つめた。僕は妙なことに気付いた。壁は相変わらずその距離を縮めてはいないのだ。

あのコンビニの前の車道から見た壁との距離は、月明かりに照らされてばやけてはいたが、全然縮まっていなかったのだ。

おかしい、何かがおかしい。いつもなら学校から3、4時間ほど自転車を走らせれば壁に着くのだ。

自転車を放り投げ川原の土手に座り込んだ。

心臓は今にも飛び出そうなほど早鐘を打ち、肺は酸素を要求して大きく弾む。

「共犯者だね私たち・・・」

サキが僕にしがみついていた。

「怖かったよ、とっても怖かった・・・」

心細そうに言うサキの顔があった。

どちらからともなく唇を求めた。僕の身体とサキの身体がぴったりと収まる。まるでレゴのブロックみたいに・・・。

「ああ、痛たたた・・・」

「何？どこか怪我でもした？」

勃起していた。サキの重みで押し付けられ、張り詰めたペニスの痛みが全身を貫く。

サキも僕の下半身の変化に気付いたようだ。

「凄いいね、来生君のここ・・・」

サキに見られてるというだけで更に直立しようとする。サキは不思議そうに僕のおそこを見続ける。

「橋の下にいい」

言われるままに僕は幾分前屈みになりながらサキの後ろに従う。

「ここなら誰も来ないよね・・・」

街灯がやっと届く薄暗い脚橋の一つにサキに言われるまま座り込んだ。

コンクリートの地肌に卑猥な言葉や分けの分らない漢字がスプレー缶で殴り書きされていた。

「来生君、大変でしょ・・・手でやってあげようか？それとも口で・・・」

サキの大胆な言葉に僕はたじろぎ、それでも何かを期待している自分に赤面する。

「兄貴の部屋でね、何回も盗み見してるからAV。男の子のこと少しは分るから」

サキの瞳が僕を捉える。なんて無邪気な顔で見るんだ。サキの指がズボンのチャックに触れる。

僕の頭は混乱の局地に達する。期待で今にも暴発しそうな僕のペニスをサキは優しく撫で続ける。

チャックを下ろしたサキの指がペニスに触れる瞬間僕は果てた。

強烈な快感が全身を貫く。あっという間に果てたことへの恥ずかしさと精液の染みに僕は両手でパンツを隠す。

「出ちゃったの・・・？」

「サキ、サキ、そんなに見ないで、お願いだ」弱々しい言葉しか咽を通らない。

サキは安心してぐったりした僕をいとおしむようにそっと胸に抱く。頬に触れる柔らかな制服越しの乳房の感触。

「来生君・・・これ以上は無理よ。私にはこれが精一杯だから・・・」

今にも泣き出しそうな顔でサキが言った。

サキが感じていたであろう不安を僕はやっと感じる事ができた。サキも確かに感じていたのだ。僕がサキに覚える欲望を・・・しかし、サキには準備が必要なのだ。もっと、もっと、長い時間が必要なのだ。独りよがりな自分の欲望の末に果てた僕自身を恥じた。

「大好きだよ、サキ」自然に口元から言葉が溢れた。

「うん、来生君がサキのこと、サキと同じくらい好きになってくれたらって思うよ」

あの日、僕らは壁のことなどすっかり忘れてしまった。

深夜遅くサキを家まで送り届け、僕は疲労感と満足感の入り混じった感情を抱きながら家に帰った。

まるで夢のような出来事、でも僕の下着にはしっかりとあの証しが残っていた。

精液でがさついた陰毛と、サキの優しい指の感触。

その日の夜は、疲れきっていた。ベッドに入るなり睡魔が襲ってきた。

深い深い眠り・・・マリアナ海溝のような・・・川田が現われた。

「・・・この安息を捨てる勇気があるか、又ク又クとしたこの場所を捨てて、お前は突き進む決意があるか・・・」

「か、川田君、どういう意味だい？」

「お前が今知覚しているものは全て幻想だとしたら・・・あの頭上

高くそびえたつ壁だけが唯一の現実なんだとしたら、どうする・・・」

『僕には君の言っている意味がよく分らないよ、現実には僕の周りにはびこっているこの街や、学校や、サキや、奥寺や、そういうことだろ。だって壁は僕にしか見えないんだよ!』

『・・・全てはお前の頭の中の幻想なんだよ。壁だけが真実なんだ。何故なら俺はその壁の向こう側からやってきたんだから、来生お前次第だ。コマ・ベイビーのように安楽な母親の胎内に留まっているか、それとも壁の向こう側の世界を選択するか、全ては、お前次第だ』

『分らない!分らないよ、だって僕には壁を超える術を知らないんだ!』

『分っているだろ、来生お前には分っているはずだ。お前が創り出した全ての幻想を断ち切る術を・・・サキだよ、その鍵はサキにあるんだ』

『分らない!分らないよ!何を言っているのか川田!何を言ってるんだよ!』

川田はその唇に薄笑いを浮かべ僕を凝視している。

『お前には出来そうもないな、俺がその幻想を断ち切ってやるよ。』

お前が愛し。信ずるものを・・・俺がむごたらしいやり方で、お前の見ている前でサキを犯し、殺してやるよ・・・お前には俺を止められない』

川田の言葉が鋭く僕の胸を突いた。

何故だか分らない。しかし、川田はそれができ、そして、それを実行することを僕は直感で知った。

『何故だ!何でそんなことをするんだ!川田、止めてくれ、お願いだ』

『俺が力づくでサキの中に入って、サキの快感に歪む顔をお前は手

をこまねいて見てるだけしかできなんだよ、そして、お前の見ている前でサキは死ぬんだ』

ベッドの脇の携帯が揺れた。

サキは、ゆつくりとその携帯を取り、相手を確認かめ耳元に運んだ。
『来生君・・・どうしたの、こんな遅くに』

『僕は、僕は・・・サキ、愛してるんだ、逢いたいんだ、今すぐ逢いたいんだ』

サキは一瞬躊躇ったけれど、こう答えていた。

『私だって、いつも来生君といたいよ・・・離れたくないよ』

・・・止める！川田・・・止めてくれ！・・・

枕がびっしょりと濡れていた。涙がとめどなく溢れた。自分がいかに無力な存在なのか思い知らされた。

愛するもの、唯一信じるもの、僕の世界の全てが眼の前で破壊されてゆく。僕にはどうすることも出来ないことを悟った。

川田、お前を殺す！ お前だけは許さない。今まで感じたことのない憎悪が全身を貫いた。

『今、学校の屋上にいる。逢いたいんだ、とても、すぐ来て・・・
来生の切羽詰まった声が耳元に響いた。何かがあったのだ、すぐ行くからと答え、サキは携帯を置き、素早く身支度を整えるとそっと部屋を出た。』

・・・駄目だサキ！ 行っちゃいけない。お願いだ、行かないで！・

・

闇の中に浮かび上がった真っ黒な校舎はさながら巨大な墓場のように佇んでいた。

来生が私を必要としている、何かあったんだ、サキは来生に早く逢いたいという思いで校舎の屋上に急いだ。

当直の姿がないことにも、真っ暗な廊下にも、非常口の灯りだけが灯った校舎にも疑いを抱かなかった。

屋上の扉を開け、来生の名を呼んだ。

返事はない。

川田はそんなサキの様子を暫く眺めていた。その瞳は羊を追いつめた猛獣のように狡猾だった。

『来生見ているか・・・俺の脳裏に焼きついたこの影像を、お前にはお前の全てが破壊されるのを止める手立てすらない！』

川田は背後からサキを抱きすくめ、片手でサキの口を塞いだ。

『だ、誰！？・・・か、川田君！』

サキは無力だった。川田はことさら乱暴にサキの下着を引き千切り、何度も、何度も蹂躪した。

『や、止めて・・・お願いだから、もう止めて・・・なぜ？なんでこんなこと・・・』

来生は、まるで自分がサキを犯しているような錯覚に陥り、無念さに唇をかんだ。

生暖かい血の味が口内に広がった。

『許さない！川田お前だけは絶対許さない！』

『来生、お前の幻想を打ち砕いてやったんだ！ほら見る、サキの快楽に歪んだ顔を・・・』

川田は乱暴にサキの髪を掴み、その顔をゆっくりと舐めた

サキは殆ど気を失いかけていた。ぐったりとしたサキの身体を弄び、川田はサキを犯し続けた。何度も、何度も、執拗にサキを突いた。

虚ろな瞳、唇の端からもれる唾液がざらついたコンクリートの床に垂れた。

その様子を見ながら川田は更に激しくサキを突いた。

『来生君、来生君、来生君・・・』

うわ言のように、縋るようにサキは来生の名を叫び続けた。

ズタズタに引き裂かれた衣服を何とか両手で身に付け、サキは、屋上の手摺に縋った。

その眼からは大粒の涙がとめどなく流れた。

川田に受けた仕打ちはサキの心を粉々に砕いた。来生への想いが深ければ深いほどサキは絶望に苛まれた。サキは来生とはもう逢えないのだと思った。

意を決したようにその手摺を飛び越え一言言葉を発した。

「来生君・・・」

サキの身体が屋上から真っ暗な闇の中にダイブした。

手摺の傍にサキの片方のスニーカーが転がっていた。

僕は覚醒した。僕の片手にはサキのスニーカーがしっかりと握られていた。

いつの間にか僕は校舎の屋上にいた。

何が何だか分らず暫く呆然と立ち尽くした。

川田を捜した。憎しみが僕を駆り立てた。あいつを必ずこの手で殺す。

そうだ、あいつを殺したら僕もサキの後を追おう。

川田はいなかった。川田がいた痕跡すら捜す事ができなかった。

僕ははっと気付き手摺から身を乗り出し、闇の中で眼を凝らした。落下した地面にはサキの姿はなかった。

階段を駆け下り、サキの姿を捜し回った。そこにサキの姿はなかった。

もう気付いてもよさそうなのだろう・・・脳裏の片隅で川田が囁いた。

お前は、お前の幻想の中でサキを犯し、サキを殺したんだよ。

もう二度とサキには逢えないんだ！ お前の愛するもの、お前の唯一信じるもの、そんなものはドブに捨てちまったんだ！永遠にお前は自分の手でサキを葬ったんだからな。

俺は、お前が創り出したまやかしだ。川田なんて人物は初めからいなかったんだよ！

何故ならお前が俺自身だからな。仮想の現実の中でお前は今まで又ク又クと暮らしていたんだ。とつくに気付いてるんだろうがな・・・。

限らない喪失感が僕を捕らえた。もう二度とあの幸福な場所へは帰れないんだと悟った。

僕は、僕の手で創り出したものを、何もかも破壊したのだ。

あの又ク又クとした平穏を僕は、僕の手で自ら葬り去ったのだ。

あの溢れていた涙すら今はもう一滴も流れはしなかった。

手探りの暗闇の中で僕は眼を凝らした。

厩気楼の先にあの灰色の壁は確かにあった。

いや、もう僕にはあの壁しかなかったのだ。

どこをどう歩いたのか・・・僕はいつの間にか壁の前に立っていた。そして僕の直感が正しかったことを、僕は知った。そこに何かがあることを僕は初めから知っていたのだ。

僕の愛するもの、僕の唯一のかけがえのないものがそこにあることを・・・。

眼の前に見慣れた影があった。サキだった。裸足の片足がうつすらと土にまみれていた。

「サキ！サキ！」

「来生君、来生君！」

「どうしてここに？」

「分らないわ、夢を見ていたわ・・・夢の中で壁に閉じ込められて、迷子のように彷徨って気がついたらここにいたの」

サキの足下を凝固した血痕がこびりついていていた。

「どうしたのサキ？血が・・・」

「うん、多分・・・あれだと思うの、私まだあれなかったことなかったから・・・」

そういったサキの真っ赤に染めた頬がいとおしかった。

「サキこれ履く？」

「ええっ！？夢の中で無くしたのよ、その片方のスニーカー・・・なぜ、来生君が持つてるの？」

「サキ、サキ、もう逢えないと思ってたんだ。君を永遠に失ってしまったと・・・」

サキは僕の言葉を待たずに僕に抱きついた。

「いいの、もういい。来生君の傍にいられる、それだけでいいの」

僕らは世界で一番長く抱擁し、世界中で一番熱い口付けを交わした。

得られるものと、得られないもの、そして、失うものと、失ってしまったもの・・・混沌とした地平の果てで僕は、かけがえのない

ものを再生したのだ。

僕とサキの物語は今始まったばかりだ。

僕らはどちらからともなく服を脱ぎ、それをゆつくりとたたみ壁の前に置いた。

羞恥心など微塵もなく僕らは手を繋ぎ、そして壁に1歩近付いた。

壁の前で僕とサキはどちらからともなく見つめあい、大きく深呼吸をした。

裸のまま僕らは抱き合い、お互いの肌の温もりを確かめ合った。僕らの前に立ちはだかっていたその巨大な壁は今はもう無力だ。何故なら僕らはその壁を凌駕する方法を知ってしまったからだ。

「サキそろそろ行こうか・・・」

「うん、来生君となら何処までだって行けるよ・・・」

僕らは壁に向かって1歩踏み出す。

更に1歩・・・まるでそこには何もないかのように僕らは壁と同化する。

僕らは壁の中にいる。サキが恐怖から僕の腕を強く握りしめた。まるで、母親の胎内のように僕らは漂う。羊水の海を木の葉のように漂い続ける。

そこには極小から極大まであらゆる世界の営みが漂っていた。

僕らは50億年後の太陽系の崩壊を片目で見、人類の進化をもう一方の瞳で捕らえた。

銀河系を端から端まで旅し、180億光年先の宇宙の端っこを垣間見た。

有限で捕らえられるもの全てと絶対無が混在するそれらを僕らは知覚する。知覚こそが無限だと覚醒してゆく思考の渦。カオスの地平で僕とサキは大きなため息をついた。

そこには生と死、神とか人生とか宇宙とか全ての答えが漂っていた

のだ。

針の先のような光が見えた。みるみる光は大きくなった。僕らはもうすぐ壁を突きぬけ新たな世界のエッジに立つのだ。

そして、その淵に立って僕はこう叫ぶんだ。声の限りにこう叫ぶんだ。

「僕は・・・世界と・・・一つになるんだ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1938v/>

壁とその不確かな存在

2011年7月29日00時28分発行